

佐多稲子全集

第六卷／機械のなかの青春

講談社

佐多稲子全集 第六卷



昭和五十三年五月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号一二二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京八―三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

◎佐多稲子 昭和五十三年 著一冊・乱一冊はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

あるグループ	生命	無数の一人	旧縁	*	燃ゆる限り	機械のなかの青春
340	329	315	302		141	7

苦いおもい 353

若い日 365

今日になっての話 381

あとがき・時と人と私のこと (6) 397

注解 408

初出誌紙・発表年月 410

佐多稲子全集

第六卷

機械のなかの青春

一

混打棉^{こんだめん}の作業場では機械が大きくて、まるで機関車が並んでいるように見えた。その大きな機械は、複雑な形に丸く高くなったり、平らに低くなったりして一台を成していた。いろいろな原棉がこの機械の中で混合され、この複雑な形の中を通って、紡績の最初の棉ができてゆく。

広い作業場全体がわあん、と大きい音響を立てていた。巨大な機械とこの回転する音とで、この作業場は荒っぽく激しい。ほとんどのものをいうことのない娘たちは、全身でその機械に取り組んでいた。絶えまなく舞って、機械に落ちてくる棉ばこりを両手に持って、刷毛で払い落とすもの、棉が機械からおくり出されて

ローラに巻きついた、重量四貫のラップを機械からはずすもの、クリバーラチスの上に原棉をちぎって並べるもの、彼女たちも機械の一部だった。

会田てる子は自分の前を、ゆるやかに絶えまなく動いてゆくクリバーラチスに、丸まっつい上体をかがめて、原棉をちぎってはのせていた。彼女のまだ、ふっさりとお揃えて切ったおかつぱの先が、まっ白い頭布をうしろで結んだあたりから、ツンとのぞいていた。彼女は原棉をクリバーラチスにのせながら、ときどき機械の音に耳をかたむけていた。さっきから度々そうやっていいる。何だか、彼女の台の一台が違う音を立てている。キイキイとどこかでちがう音がするのだった。クリバーラチスは何事もないように流れていた。ラチスフューダーが詰まったのでもない。それでも、どこかでキイキイと、いつもとちがう音を立てている。どこか変なのだ。

「へんてこやわ」

それは独り言だ。てる子は、ほっそりとした利口そうな顔に眉根を寄せて、耳をかたむけるようにして機械のまわりを小走りに歩いた。

「どこかわからん」

しかもやっぱりキイキイという音。また棉をちぎつてのせながら、彼女は不安でしかたがない。

「どうしたのかしら」

何かそのキイキイいう音に、彼女はせき立てられるようだった。どこか悪い。それなら早く直してやらなければならぬ。ちゃんと回っているかしら。どこかはずれていないかしら。機械はその「機械的」正確さで何かの場合にすぐ反応を見せる。だから彼女はいつも機械の音に耳を澄ましている。だが、だからといって、彼女の疲労には誰が耳をかたむけているだろう。

保繕工の草野がちょうど通りかかっていた。

「あッ、草野さアん」

と、てる子は呼んだ。その声は高かったけれど、機械の音に消されて草野には聞えないらしい。保繕工の草野はのっぼの青年だ。長い脚ですたすと歩いてゆく。てる子は自分の声が相手に聞えないと分ると、走りながら、ばん、ばんと手をたたいた。そしてその次には、小指を口に当ててびいっと指笛を吹いた。彼女の一生懸命な顔が、指笛を吹いてふくらんだ。

草野は振り返って立ちどまった。

「おう、何だい」

てる子はまた大きな声で叫んだ。

「どこか分らん、機械が泣くうー」

そして彼女も泣きたいような顔をしていた。係長に何かいわれないうちにも、機械の泣くのが停まって欲しい、そんなおもいもごっちゃになって、彼女は機械が泣くと、自分も泣きたくなるのだ。

草野は、そのどこか分らんキイキイという音の出所を探し始めた。それから機械のそばの床の上に、右手の尻のところを下げた袋から、ドライバーやスパナやハンマーを並べて、仕事にかかった。てる子はその間も他の台で自分の作業をつづけながら、ときどき草野の手元をのぞいたりしていた。やがて草野は仕事を終えたらしかった。てる子は回転をつけ耳を澄ました。

「なおったわ、どうもありがとうね」

「ああ、いそがしい、いそがしい」

草野は、おどけたようにいうと、ハンマーなどを拾って袋に入れた。その額に機械の油がくっついていく。

「さっきはもう、どこがキイキイいうのか分らんし、どうしようかおもったわ……草野さん。顔に油がついてる」

と、てる子は優しい調子の東北なまりでいった。草

野は軽く吐き捨てるように、

「ああ、どうせ油はついてるよ」

尻の上の袋をたたいて、例の歩きつきで草野が行ってしまふと、てる子はまだ微笑の残った表情でまた機械に耳を澄ます。機械はすっかり機嫌を直した。ああ、よかった、てる子は口の中でいって、自分の仕事もあともうすぐだ、とおもう。二時になれば彼女は解放される。とにかくそれまで、彼女の手先きで原棉がちぎられてクリバールチスの上ののってゆく。原棉はアメリカやメキシコからきたものだ。てる子は少女らしい感情で、この原棉が遠く海を渡ってきたことをおもう。やがてこの原棉が、糸になって、布になって、生れ故郷にも帰ってゆくのだとおもう。彼女は自分のちぎっている原棉に寄せて、彼女自身の、生れ故郷の家を離れて来ていることを考えるのだ。てる子は自分のちぎっている棉に心の中で話しかけていた。彼女も機嫌を直した証拠だった。係長に見つけられないうちに、あと番の人が来ないうちに、機械の泣くのが停まったので、てる子は腰の痛いのも忘れた。それにもうすぐ二時。

もうすぐ二時、精紡では、あと番の娘たちが工場の中に入って来た。精紡機は無数の管糸を回転させて、カタカタカタカタと、にぶくこもった音を立てている。ここでは煉篠、粗紡と通ってきて、艶やかに柔らかなった篠が、篠巻から流れて糸になってゆく。長い一台の精紡機にぎっしり並んで上と下とで回転している篠巻と管糸、その途中が切れると、そこだけ管糸はとまっている。ついこの間まで、糸が切れても回転はつづいていたので、上から流れてきた篠が吸い込まれないで、花のように盛り上ったものだ。それをむしるとき、彼女たちの涙が流れた。彼女たちはラベット拭きを飛ばして、台の上の棉ぼこりを払いながら、精紡機の周囲を歩きつづけている。そして糸切れを見つけるとそこにとまってつないでゆく。

もうすぐ二時、しかし石坂くには、他の娘たち同様、最後の瞬間まで台のまわりを歩きつづけている。娘たちの姿は、精紡機の間に隠れてほとんど見えなかった。一台から次の台へ移ってゆくとき、その角にちらっと見えるだけだ。石坂くへの受持台数は五台、朝五時から、糸切れを見つけた時の他は、こうして絶え

ずその五台のまわりを歩きつづけている。彼女は疲れて、不機嫌な顔をしていた。それで頬骨の高い顔がよいにござつて見える。石坂くには、あと番との交替の前、トップボートを掃除しながら歩いてた。

その間にも、無数に回転している中でそれだけ停まった管糸を見つけるとそこに足をとめた。とめたとたんにすばやい両手の動きで、管糸を抜きとり、糸口を引き出してトラペラに引っかけ、上から流れてくる篠に、ひよいとねじるようにくつつけた。管糸は、その瞬間にキリキリと回り出し、すぐその回転さえ見えないようになった。彼女はまたすばやい両手の動きで台の掃除をしながら歩いた。

一時四十五分、リーンとベルが鳴った。ひそやかに娘たちの姿が移動する。くには自分と交替するあと番の娘を見ると、

「今日の台ものすごく切れるよ」

ほとんど怒ったような表情だ。

「ものすごい」

相手は笑って聞き返した。今出て来たその娘は、帽子も前かけも洗いたてだった。

「うん、とっても」

「承知だよ。……だけど、厭だねえ」

そういうとき、その娘はすでに台を見て歩き出していた。

大きな板戸をあけて廊下に出るとき、三好さなえがくにと一緒にになった。二人はコンクリートの廊下を走った。むこうからも、またうしろからも、娘たちが走って上ってゆく。

早春の、まだ冷めたい風が彼女たちの頬に流れてくる。廊下から、一度外へ出るもの、まっすぐに寮へ向かってゆくもの、

「まるで、運動会だね」

と、石坂くには自分も走ったくせに、追い抜いて行った四、五人のうしろを見てさういう。

「工場へ入るときは、誰も走らないから、不思議だね」

三好さなえは、鼻すじも口元もちんまり、ととのった色白の娘だ。二重瞼の目がやさしく笑っている。

「当り前さ」と石坂くには。

織布オリボから出て来た兼松美代は、現場から一步外へ出たときも、織布の激しい機械の音に、まだ、身体が取

り巻かれているような、ぼんやりした気分だった。彼女は歩きながら、ふと、自分が心の中で、右、左、右、左、と足の動きに合わせてつぶやいているのに気づいた。

「あら、いやだア」

が、またいつのまにか、右、左、右、左、

両側の織機を、左右にいなすま型に見て歩いた八時間、糸切れを見つけるとつないでは、また歩きつづけた八時間、その集中した神経が、現場を出た兼松美代の心の中でまだ惰性となつて残っていたのである。

「ぼんやりしてるねッ」

と、うしろから来たコップ差しの増井きみが、兼松美代の背中をたたいて追い越した。

「痛いじゃない！」

叫んだとたんに、彼女は我れを取りもどし、そして訳もなく無性に腹が立って来た。彼女は疲れていたのだ。

寮の入口で、脱いだスツクの靴を片手に下げて、郵便受けを覗いている娘たち。兼松美代の背中をたたいて走って来た増井きみは、弾んだ手つきで手紙を抜き取った。同室の、石坂くにと三好さなえがそれを見

た。

「きみちゃん、手紙だね」

「うん、妹から」

増井きみは、びよんと飛び上るようにして、手紙を胸に抱いて見せると、寮の廊下を駆け出した。年齢のわりに大柄だが、走ってゆくうしろ姿は、やんちゃっこみたいだ。

彼女たちの部屋は梅の寮の二階の中程だった。仕上げの島崎昭子は帽子をほどこいて、そのご自慢の長い髪を背中の上に解放してやっていた。混打棉からあがってきた会田てる子は、まだそのまんまの姿で、部屋の奥の板敷の方へ足を投げ出して、リングをかじっていた。ガラス窓の向うに空はうす白く、北国のそこでは、まだ春の気配もおそかった。てる子は、ものをいうのも億劫なほど疲れて、肩を落してリングをかじっていた。

石坂くにと三好さなえは、増井きみのあとから入って来た。

「ああ、脚が痛いよう」

と、石坂くには、脚を投げ出して、とんとんとたたいた。三好さなえは、帽子をとり、前かけをはずし

て、柱にかけてある鏡の中をのぞく。ちよつとした合
い間にも鏡をのぞく心の弾み、それは彼女が恋をして
いたから。

兼松美代も帰って来る。

「きみちゃん、さつき、ひどいねえ」

「ごめん」

と、はつはつと笑ったまま、増井きみは、壁ぎわに
くっついて手紙を読み出していた。美代に笑ったの
か、手紙の中に笑ったのか分らない。美代はもう腹立
ちは納まっていた。それに、彼女にも母親から手紙が
きている。いつも何かを身体全体でこらえていて、じ
いっと見つめているような表情の兼松美代、眉根が悲
しそうに寄っていて、それは彼女の貧農の出だという
ことを語るものだった。だが、口元がかわゆくて、そ
れが笑うとき一層形よくひろくので、いつも見なれて
いるものも、ときどきはつとして彼女の可愛らしさに
気づいたりした。優しいものの言いの調子とつり合つて
可憐にも見え、この頃の彼女に対してひそひそとささ
やかれるうわさとも合わないほどだ。

兼松美代も母の手紙の封を切った。ふつと彼女の眉
根が寄っていつそう悲しげな表情になる。が、美代は

黙ってそれを読みつづけ、読み終ると、そつとたたん
だ。ものおもしろいをひそめて、眉根は寄ったまま。

美代と同じ織布の松本かねは、いつもの足音も立て
ないような陰気な姿で、いつのまにか帰って来てい
た。自分の押入れを開けて、その前に、みんなにはう
しろ向きにすわって何かごそごそとやりはじめてい
る。

そのとき、増井きみが突然、声をあげて泣き出し
た。

「うああん……」

あーん、あーん。みんなびっくりして、きみを見
た。

「何だね、きみちゃん。どうしたの」

島崎昭子が振り向いて声をかけた。しくしく泣くと
いうのなら、大抵わかるのだ。誰だって郷里から便り
がきたとき、しくしく泣く。だが今の増井きみの泣き
方は、子供が一時に泣き出したように、いきなり、あ
ーんあーんだった。

「あれエ、きみちゃん！」

と、三好さなえ。石坂くにも脚を引っ込めた。会田
てる子はびっくりした顔でリンゴの芯を持ったまま寄

ってくる。

「うーん、何でもないんだけど、涙が勝手に、出て来るじゃん」

と、きみは、その健康そうな顔で手放しにすすり上げた。

「何を書いてあったん？ 読んでいい？」

三好きなえがきみから手紙を取って声を出して読み出した。てる子ときなえがそれをのぞいている。松本かねも、さて何事？ というように、押入れの前からこつちを覗んでいる。が、手紙は、てんで可愛い手紙だった。鉛筆で書いた幼い字、「姉さんお元気ですか。私も毎日元気で学校へ通っています。姉さんがいつか、カゼをひくといったから、今度から、パンツだけでまりつきはしないことにしました。姉さんが紙を張ってくれたリング箱の私の机に、いつもうちの人がちが何か、のつけるから、この上にモノおくなと書いて張りました。それでは、姉さんもびょうきをしないようにしてはたらいて下さい。そしてお金がたまったら、カバンを買ってくれることをお願い申し上げます。さようなら」

「なアんだ。可愛い手紙じゃない」

そういったものの、増井きみの、あーん、あーんと泣いたのは分った。きみは、その妹の手紙の可愛らしさで、自分も子どものように大声をあげて泣いたのだ。

「カバンを買ってくれることを、お願い申し上げます、はよかったねえ。申し上げます、だって」

みんな身体を曲げて笑った。増井きみもう泣き笑いの表情になって、

「この上にモノおくな、っていうのが、とってもおかしいの。モノおくの、いつも自分なんだもの」

「そうお。小さいとき、誰でもそんなだね」

兼松美代は弟に本を買ってやる約束をおもい出した。読みかけの母の手紙は、しかし、少し気になることが書いてある。が今はみんなは、きみの妹の手紙のことからそれぞれに郷里の弟妹をおもい出した。そして島崎昭子も。

「ああ、私、弟を大学へ入れてやらなくちゃあ」

と、彼女は自分に気合いをかけるように言った。彼女は文化、芸術に懂れている。その点、みんなとは少し自分を違うようにおもっている。けれども彼女はあけっ放しに自分の夢をいつでもみんなに語って聞かせ

る。

「私、東京へ出てゆきたいわア。だって、私、そこが生れ故郷なんですよ。私、女優になりたいの。こんな顔だつてなれるわよ。だって、今は女優だつて顔だけじゃないわ。性格俳優っての、あるのよ」

しんから女優になりたいとおもっているわけではない。ただ自分は夢を持っている、ということ満足していた。戦争で、疎開をしたまま、母と弟妹が近くの町に住んでいた。

さなえもてる子も小さい弟妹のことではしゃべり出した。それにみんな、現場ではほとんど口をきかなかったのだ。石坂くには、彼女に似ず、今は黙って、笑いながらみんなの話を聞いている。彼女には、大阪に工場つとめをする兄の一家があるだけだった。日頃あまり文通もない。だからみんなの姉妹弟の愛情を、笑顔で察しながら聞いている。何か少し淋しさも、その笑顔の中にふくめていた。松本かねだけは、また押入れの方に身体を逆もどりさせた。なんだ、そんなことだったのか、というふうに。

みんなは元気になり、昭子やくにたちは前かけや運てん袋や帽子などを洗いに洗濯場へ降りていった。会

田てる子と増井きみは洗濯を早くすまして、学園へ行かねばならない。廊下では寮の事務室から拡声器で、面会人の知らせなどで呼び出しを放送している。……松の寮の誰々さん、ご面会でそれから面会室へおいで下さい……

兼松美代は母の手紙を小物入れのボール箱に藏いながら、今夜、自治委員会だったのを思い出した。

「さなえちゃん、今夜、自治委員会やねえ」

「ああ、そうねえ」

三好さなえは、行李の中から何か引き出していた手をちよつと止めて黙った。今は二人きりだった。

「あのねえ、私ねえ」

と、彼女は美代の方へ振り向いた。

「なに？」

と、美代は尻上りに優しくいつて顔を上げる。するとさなえは美代の視線をはずしてうつむいた。

「私、今夜、ちよつと町へ出て来たいの」

「へえ、そう。買物？」

そういつてから美代は、さなえの恥じらった首の据え方で、ああ、と察した。

「栗本さんと一緒ね？」